



世界の女性とともに

吉川 真由美

国連女性基金（UNIFEM）は、国連の女性のための基金です。各国政府やN G Oと協力しながら、世界 100 カ国の国々でプロジェクトを実施し、女性に偏在する貧困の解消、女子教育・識字教育支援、HIV/AIDS 陽性女性の自立支援、女性への暴力撤廃に取り組んでいます。

厳しい環境の中、世界では 1 分間に 1 人の女性が出産や妊娠で命を落としています。男子と同様に教育を受けることができず、字も読めない女性が途上国に偏在しています。問題の行き着く先には、「貧困」があり、「人権」などという言葉とはまったく無縁の世界があるのです。

日々の活動や、現地視察、A P E C のような世界会議参加を通し、今、痛感しているのは、「サポートすることの難しさ」と「女子教育の重要性」です。途上国には、にわかに信じ難く、許しがたい慣習や価値観が存在し、それらが女性たちに大きな苦しみを与えていることも確かです。しかし、先進国に住む私たちの「モノサシ」で図り、「あなた方は間違っている。」と彼らを否定することは許されません。また、そう言ったところで、彼らはすぐには変わらないのです。「それは女性の『心』と『身体』を傷つけることなのだ。」というメッセージと正しい情報を粘り強く発信し続け、相手が何を望んでいるのかをしっかりと把握し、気持ちをくみ取りながら、サポートを行っています。彼らが自分で立ち上がり、自分たちで現状を変えていくとするまで、現場は試行錯誤と困難の連続です。

途上国、とりわけサハラ砂漠以南は世界で最も貧しい地域といわれ、A I D S 罹患率や乳幼児死亡率が非常に高く、国際社会の大きな課題となっています。教育を受けた女子に育てられた子供の死亡率は確実に低くなるため、途上国での女子教育の重要性が叫ばれるようになってきましたが、義務教育が普及していない国では、教育費が高いため、男子優先になります。女子は貴重な労働力で、人身売買などで家計を助ける道具となることもあり、教育は二の次なのです。

先日、群馬県主催の講演会で話し終えた後、「私も途上国の女性の教育支援をしたい。私もお茶大を目指します。」と女子高校生が声をかけてくれ、大変感激しました。私は、地理学科で、フィールドワークの大切さ—自分の目を見て、自分の身体で感じて、自分の頭で考え、行動することの大切さ—を学びました。それは、現在の私の根っこになっています。この学び舎で足腰を鍛え、世界の女性たちとともに活動する女性がたくさん飛び立ってくれることを切に願います。たまたま、平和な日本で生まれ育ち、教育の恩恵など考えたこともなかった私は、世界の現状に愕然としつつ、改めて教育のありがたさを肌で感じています。「途上国の女子教育」—日本の教育に尽くしてきたお茶大が果たすべき国際的な使命だと確信しています。

よしかわ・まゆみ

第 35 回生

国連女性開発基金日本国内委員会常任理事